

## 博士論文（要約）

論文題目 福井県嶺北方言のアクセント研究

氏名 松倉 昂平

## 目次

1. 本稿の目的・記述対象地域の概説 .....	11
1.1 本研究の背景・目的.....	11
1.2 記述対象地域の地理概説 .....	11
1.3 行政区分の歴史的変遷 .....	13
1.4 調査地点.....	14
2. 記述対象方言の概説 .....	21
2.1 音素体系.....	21
2.1.1 母音 .....	21
2.1.2 子音 .....	22
2.1.3 音節構造.....	22
2.2 本地方周辺の方言区画 .....	23
2.3 「居る」とその否定形の語形の分布 .....	26
2.4 動詞の活用体系の地域差 .....	27
第I部 体系別記述.....	31
3. アクセント分布の概観.....	31
3.1 白峰・大杉・横浜 .....	32
3.2 加賀・大谷 .....	33
3.3 池田・芦見 .....	35
3.4 大野・東浦（垂井式） .....	36
3.5 三型アクセント .....	36
3.6 二型アクセント .....	37
3.7 無型アクセント .....	38
3.8 曖昧アクセント .....	39
3.8.1 「曖昧アクセント」とは何か—無型と多型の接触地帯で— .....	39
3.8.2 「曖昧」と呼ぶところの正体は何か——型区別意識の抑圧—— .....	40
3.8.3 曖昧アクセントと無型アクセントの分布域 .....	40
4. あわら市・坂井市・福井市の三型アクセント .....	43
4.1 地理・方言概観.....	44
4.1.1 あわら市.....	44
4.1.2 坂井市三国町.....	45
4.1.3 福井市沿岸部.....	45

4.2 嶺北地方沿岸部の三型アクセント地域におけるアクセント研究史.....	46
4.2.1 平山輝男 (1953) .....	46
4.2.2 新田哲夫 (2012), 松倉昂平 (2014), 松倉・新田 (2016) など .....	47
4.3 あわら市浜坂方言の三型アクセント .....	48
4.3.1 調査方法・体系の概要 .....	48
4.3.2 A, C 型の音調.....	49
4.3.3 B 型の音調 .....	50
4.3.4 4 拍以上の名詞における「所属語数の偏り」と複合名詞アクセント .....	51
4.3.5 2～4 拍動詞の活用形アクセント .....	52
4.3.6 3～4 拍形容詞のアクセント .....	56
4.4 あわら市北潟方言の三型アクセント .....	57
4.4.1 調査方法・体系の概要 .....	57
4.4.2 B 型の音調 .....	58
4.4.3 北潟方言の音調交替現象 .....	59
4.4.4 複合名詞アクセント .....	63
4.4.5 助詞類のアクセント .....	64
4.4.6 2～4 拍動詞の活用形アクセント .....	67
4.4.7 類別語彙との対応 .....	70
4.5 坂井市三国町安島方言の三型アクセント .....	71
4.5.1 調査方法・体系の概要 .....	71
4.5.2 A 型の音調 .....	72
4.5.3 B, C 型の音調 .....	74
4.5.4 音節構造とアクセント .....	76
4.5.5 文節内部の韻律構造・付属語の分類 .....	78
4.5.6 複合名詞アクセント .....	85
4.5.7 2～3 動詞の活用形アクセント .....	86
4.5.8 類別語彙との対応 .....	87
4.6 福井市鮎川方言の三型アクセント .....	89
4.6.1 調査方法・体系の概要 .....	89
4.6.2 複合名詞アクセント .....	93
4.6.3 2～4 拍動詞の活用形アクセント .....	94
4.6.4 3～4 拍形容詞のアクセント .....	96
5. あわら市・坂井市の二型アクセント .....	98
5.1 三国式アクセントの研究史と地理的分布 .....	99
5.1.1 平山輝男 (1953), 寺田泰政 (1951) .....	99

5.1.2 金田一春彦 (1975).....	99
5.1.3 佐藤亮一 (1983, 1988).....	99
5.1.4 山口幸洋 (1984).....	100
5.1.5 松倉昂平 (2014).....	100
5.2 あわら市清滝方言の二型アクセント.....	101
5.2.1 調査方法・体系の概要.....	101
5.2.2 $\alpha$ 型の音調.....	102
5.2.3 $\beta$ 型の音調.....	102
5.2.4 複合名詞アクセント.....	102
5.2.5 2~4拍動詞の活用形アクセント.....	103
5.3 坂井市丸岡町山竹田方言の二型アクセント.....	106
5.3.1 調査方法・体系の概要.....	106
5.3.2 $\alpha$ 型の音声的バリエーション.....	107
5.3.3 $\beta$ 型の音声的バリエーション.....	108
5.3.4 2, 3拍形容詞のアクセント.....	108
5.4 類別語彙との対応関係.....	109
6. 石川県加賀市方言の多型アクセント.....	112
6.1 石川県加賀市の地理・方言概観.....	112
6.2 先行研究.....	113
6.3 塩屋方言のアクセントへの語音・語種・形態素構造の関与.....	114
6.3.1 調査方法・体系の概要.....	114
6.3.2 2拍名詞の核の位置.....	115
6.3.3 3拍名詞の核の位置.....	116
6.3.4 4拍名詞の核の位置.....	118
6.3.5 助詞類のアクセント.....	119
6.3.6 2~4拍動詞の活用形アクセント.....	120
6.3.7 2~4拍形容詞のアクセント.....	122
6.4 中津原方言のアクセント体系.....	124
6.4.1 調査方法・体系の概要.....	124
6.4.2 2拍名詞の核の位置.....	124
6.4.3 3拍名詞の核の位置.....	125
6.4.4 2~3拍動詞の活用形アクセント.....	125
6.5 類別語彙との対応関係と塩屋・中津原方言の系統関係.....	127
6.5.1 名詞の類別体系.....	127
6.5.2 動詞の類別体系.....	128

7. 福井県今立郡池田町の「準多型」アクセント .....	130
7.1 今立郡池田町の地理・方言概観 .....	130
7.2 先行研究.....	130
7.3 調査方法・本章の概要 .....	131
7.4 2~4 拍単純名詞の音調.....	132
7.5 4~6 拍複合名詞の音調.....	134
7.5.1 前部 2~3 拍複合名詞.....	134
7.5.2 前部要素が 4 拍複合名詞.....	136
7.6 5~6 拍単純語の音調.....	137
7.7 アクセント体系のまとめ .....	139
7.8 類別語彙との対応関係 .....	139
8. 福井県南条郡南越前町河野地区のアクセント .....	141
8.1 地理的概観.....	141
8.2 先行研究.....	141
8.3 アクセント分布.....	142
8.4 南越前町糠.....	142
8.5 南越前町赤萩・具谷.....	143
8.6 南越前町大谷.....	145
8.6.1 調査方法・体系の概要.....	145
8.6.2 2 拍名詞の音調 .....	146
8.6.3 3 拍名詞の音調 .....	147
8.6.4 4 拍名詞の音調 .....	149
8.6.5 2~4 拍動詞活用形のアクセント .....	150
8.6.6 語頭母音の長音化現象について .....	152
第Ⅱ部 現象別記述・方言間比較 .....	156
9. N 型諸方言における動詞活用形アクセントの比較・対照.....	156
9.1 本章のねらい.....	156
9.2 動詞の類別体系.....	157
9.3 動詞の語類別に整理した活用形アクセント .....	159
9.3.1 2 拍一段動詞.....	159
9.3.2 2 拍五段動詞.....	160
9.3.3 3 拍一段動詞.....	161
9.3.4 3 拍五段動詞.....	162

9.3.5 4拍一段動詞.....	165
9.3.6 方言間の比較・系統分類.....	167
9.4 方言別に見た動詞活用形アクセント.....	171
10. あわら市北潟方言の後部3拍複合名詞アクセント.....	175
10.1 N型アクセント諸体系における複合語アクセント規則.....	175
10.1.1 九州二型.....	175
10.1.2 隠岐三型.....	176
10.1.3 福井三型.....	176
10.2 北潟方言のアクセント体系.....	177
10.3 北潟方言の複合語アクセント.....	178
10.3.1 1拍+3拍複合名詞.....	178
10.3.2 2拍+3拍複合名詞.....	179
10.3.3 「式保存」の成り立たない語例（全体の傾向と問題提起）.....	180
10.3.4 「前部要素B型→複合語A型」となる要因.....	181
10.3.5 「前部要素C型→複合語B型」となる要因.....	182
10.3.6 「前部要素A, B型→複合語C型」となる一因.....	183
10.3.7 複合名詞アクセント規則のまとめ.....	184
10.4 「式保存」の例外が生じる通時的背景.....	184
10.4.1 高知市方言との型の対応.....	184
10.4.2 高知市方言と北潟方言における「式保存」の例外.....	185
10.4.3 高知・北潟両方言が共有する「式保存」の例外——その通時的由来——.....	186
10.5 まとめ.....	187
11. 地理的分布の解釈.....	188
11.1 「類別体系」の地理的分布を読み解く.....	188
11.1.1 アクセント史研究への言語地理学の応用.....	188
11.1.2 「類別体系」の分布を読み解く方法論.....	189
11.1.3 2拍名詞の類別体系に見る周圏分布.....	190
11.1.4 3拍名詞の類別体系に見る周圏的分布.....	192
11.2 N型諸方言における個々の単語固有のアクセント分布.....	195
11.2.1 N型諸方言の分布域.....	195
11.2.2 「沿岸 vs 内陸型（東西型）分布」.....	196
11.2.3 その他の分布パターン.....	201
11.3 2拍5類名詞に見る「移行性分布」.....	205
11.3.1 日本語アクセント史研究と語彙拡散仮説.....	205

11.3.2 北陸諸方言に見られる 2 拍 5 類の分裂 .....	207
11.3.3 静岡県浜松市周辺に見られる類の分裂と移行性分布 .....	210
11.3.4 2 拍 5 類の分裂は共通祖体系にあった区別の共通保存か .....	211
11.3.5 5 類の分裂は方言接触によるものか .....	213
11.3.6 5 類の分裂は語彙拡散によるものか .....	214
11.3.7 なぜ語彙拡散過程 (5 類の分裂状態) が保存されるに至ったか .....	220
12. 総括 .....	223

## 本文

(すでに図書として出版されており、契約内容により、論文内容の記載は行わない)

### 〈書誌事項〉

著者名	松倉 昂平
著書名	福井県嶺北方言のアクセント研究
出版社	武蔵野書院
出版年	2022 年
ISBN	9784838607679



## 参考文献

- 秋永一枝 (1980) 『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』東京: 校倉書房.
- 天野俊也 (1968) 「方言」真名川流域民俗調査団 (編著) 『真名川流域の民俗』279–306. 福井: 福井県郷土誌懇談会.
- 岩井隆盛 (1955) 「石川方言のアクセントと長音・強音」『金沢大学教育学部紀要』3, 62–66.
- 上野和昭 (2009) 「近世京都における複合名詞アクセントの史的変遷—和語から成る{2+3 構造}の複合名詞について—」『日本語の研究』5(4), 16–30.
- 上野善道 (1984a) 「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会 (編) 『現代方言学の課題 2 記述的研究篇』167–209, 東京: 明治書院.
- 上野善道 (1984b) 「類の統合と式保存——隠岐の複合名詞アクセント」『国語研究』47, 1–53.
- 上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫 (編) 『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』231–270. 東京: 三省堂.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130, 1–42.
- 上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16 (1), 44–62.
- 上野善道・新田哲夫 (1983) 「金沢方言におけるアクセントと語音の関係」『日本海文化』10, 1–43.
- 上野善道・新田哲夫 (1985) 「金沢アクセントにおける世代別変化」『国語研究』49, 1–38.
- 大野市史編さん委員会 (編) (2006) 『大野市史 第 12 卷 方言編』福井: 大野市役所.
- 加藤和夫 (1992) 「福井県方言」平山輝男他 (編) 『現代日本語方言大辞典』159–163. 東京: 明治書院.
- 加藤和夫 (1998) 「石川県小松市郷谷川・滓上川流域の方言」『小松市立博物館研究紀要』34, 1–95.
- 川本栄一郎・野田浩 (1978) 「第三章 加賀市の方言」加賀市史編纂委員会 (編) 『加賀市史 通史上巻』121–176. 石川: 加賀市役所.
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』東京: 勉誠出版.
- 木部暢子 (2012) 「西南部九州 2 型アクセントの特性の比較: 助詞・助動詞のアクセントを中心として」『音声研究』16(1), 80–92.
- 金田一春彦 (1937) 「現代諸方言の比較から見た平安朝アクセント—特に二音節名詞に就て—」『方言』7(6), 1–43.
- 金田一春彦 (1953) 「国語アクセント史の研究が何に役立つか」金田一京助博士古稀記念論文集刊行会 (編) 『言語民俗論叢』東京: 三省堂. (金田一 (2005: 335–358) 所収)
- 金田一春彦 (1967) 『日本語音韻の研究』東京: 東京堂出版.
- 金田一春彦 (1973) 「比較方言学と方言地理学」『国語と国文学』50(6), 1–19.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京: 塙書房.
- 金田一春彦 (1975) 『日本の方言 アクセントの変遷とその実相』東京: 教育出版.
- 金田一春彦 (2005) 『金田一春彦著作集 第 9 卷』東京: 玉川大学出版部.
- 国語学会 (編) (1980) 『国語学大辞典』東京: 東京堂出版.

- 小林隆 (2004) 『方言学的日本語史の方法』 東京: ひつじ書房.
- 桜井茂治 (1958) 「平安・院政時代における複合名詞のアクセント法則—五音節語を資料として—」 『国語学』 33, 56–78.
- 佐藤栄作 (1998) 「語構造とアクセント型」 秋永一枝ほか (編) 『日本語アクセント史総合資料 研究篇』 552–562. 東京: 東京堂出版.
- 佐藤大和 (2002) 「外来語における音節複合への区分化とアクセント」 『音声研究』 6(1), 67–78.
- 佐藤亮一 (1983) 「福井市, および, その周辺地域のアクセント—調査法と型の区別の現れ方との関連を中心に—」 『国語学研究』 23, 1–19.
- 佐藤亮一 (1988) 「福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差, 個人差, 調査法による差」 『方言研究法の探索』 (国立国語研究所報告 93) 123–219. 東京: 秀英出版.
- 清水誠治 (2006) 「愛媛県西予市田之浜方言のアクセントと語音の関係について」 『音声研究』 10(1), 30–38.
- 寺田泰政 (1951) 「福井県下アクセントの概観」 『近畿方言学会会報』 9, 1–10.
- 東条操 (1954) 『日本方言学』 東京: 吉川弘文館.
- 徳川宗賢 (1962) 「"日本諸方言アクセントの系譜"試論: 「類の統合」と「地理的分布」から見る」 『学習院大学国語国文学会誌』 6, 1–19.
- 徳川宗賢 (1974) 「方言地理学と比較言語学」 『学習院大学国語国文学会誌』 17, 1–18.
- 徳川宗賢 (1993) 『方言地理学の展開』 東京: ひつじ書房.
- 中井幸比古 (1984) 「真鍋式アクセントの所属語彙」 『言語学研究』 3, 81–116.
- 中井幸比古 (1996) 「京都アクセントにおける式保存について」 平山輝男博士米寿記念会 (編) 『日本語研究諸領域の視点 下』 1015–1035. 東京: 明治書院.
- 中井幸比古 (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』 科研費報告書.
- 中井幸比古 (1998) 「中央式諸方言における複合名詞のアクセントについて」 『神戸外大論叢』 49(3), 1–23.
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』 東京: 勉誠出版.
- 中井幸比古・新田哲夫 (1994) 『近畿地方およびその周辺部におけるアクセントの調査研究』 平成 4~5 年科学研究費補助金報告書.
- 中澤光平・松倉昂平・新田哲夫 (2018) 「白峰方言アクセント調査報告」 『「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」 石川県白峰方言調査報告書』 13–35.
- 新田哲夫 (1985) 「加賀地方における 2 モーラ名詞アクセントの変遷」 『国語学』 140, 119–103.
- 新田哲夫 (1988) 「加賀北部地域における動詞アクセントの変遷」 『日本海文化』 14, 1–30.
- 新田哲夫 (2002) 「石川県白峰方言の形容詞—語形とアクセント—」 平成 14 年度文部科学省補助金 (特定領域研究) 研究成果報告書, 上野善道 (編) 『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究 3』 143–171.
- 新田哲夫 (2005) 「アクセント論—能登島の「式」の変化を考える」 『國文學: 解釈と教材の研究』 50(5), 34–43.

- 新田哲夫 (2006) 『石川県白峰方言の調査研究と方言語彙のデータベース化』平成 16~17 年度科学研究費補助金報告書 (基盤研究(C)課題番号 16520275)
- 新田哲夫 (2011) 「福井県三国町安島方言における maffa 《枕》等の重子音について」『音声研究』15(1), 6-15.
- 新田哲夫 (2012) 「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16(1), 63-79.
- 新田哲夫 (2013) 「越前海岸の N 型アクセント」『第 27 回日本音声学会全国大会予稿集』19-22.
- 平山輝男 (1936a) 「南九州アクセントの研究 (1)」『方言』6(4), 26-76.
- 平山輝男 (1936b) 「南九州アクセントの研究 (2)」『方言』6(5), 50-63.
- 平山輝男 (1951a) 「北陸道方言の音調」寺川喜四男他 (編)『国語アクセント論叢』193-256. 東京: 法政大学出版局.
- 平山輝男 (1951b) 「福井県下の音調 (上)」『音声学会会報』77, 21-25.
- 平山輝男 (1951c) 『九州方言音調の研究』東京: 学界之指針社.
- 平山輝男 (1953) 「福井県嶺北地方の音調とその境界線」『音声学会会報』83, 1-4.
- 平山輝男 (1954a) 「福井県嶺北地方の音調とその境界線 その 2」『音声学会会報』84, 21-24.
- 平山輝男 (1954b) 「福井県嶺北地方の音調とその境界線 その 3」『音声学会会報』85, 21-23.
- 広戸惇 (1951) 「隠岐島アクセントの考察」『島根大学論集 人文科学』1, 97-106.
- 広戸惇・大原孝道 (1953) 『山陰地方のアクセント』島根: 報光社.
- 福井県 (編) (1998) 『図説福井県史』福井: 福井県.
- 松浦年男 (2008) 「長崎市方言における例外的複合語アクセントの生起条件」『音韻研究』11, 11-19.
- 松倉昂平 (2014) 「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35, 141-154.
- 松倉昂平 (2015) 「福井県あわら市北潟方言及び清滝方言のアクセント資料」『東京大学言語学論集 電子版』36, e9-e31.
- 松倉昂平 (2016) 「福井県あわら市北潟方言の音調交替」『音声研究』20(1), 26-34.
- 松倉昂平 (2017a) 「福井市西部沿岸部及び東部山間部のアクセント分布」『東京大学言語学論集』38, 101-122.
- 松倉昂平 (2017b) 「石川県加賀市塩屋方言におけるアクセントと語音の関係—アクセント資料付—」『東京大学言語学論集 電子版』38, e1-e32.
- 松倉昂平 (2018a) 「福井県坂井市三国町安島方言の三型アクセント—付属語のアクセントと型の中和—」『国立国語研究所論集』14, 99-123.
- 松倉昂平 (2018b) 「要地方言の活用体系記述 福井県大野市方言」小西いずみ・日高水穂 (編)『全国方言文法辞典資料集(4) 活用体系(3)』(基盤研究(A)「日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築」研究成果報告書) 51-61.
- 松倉昂平・新田哲夫 (2016) 「福井三型アクセントの共時的特性の対照」『音声研究』20(3), 81-94.
- 松森晶子 (1993) 「日本語アクセントの祖体系再建の試み: いわゆる「下降式アクセント」の成立に関する考察をもとにして」『言語研究』103: 37-91.

- 松森晶子 (1995) 「下降式アクセントの由来と四国東北部諸方言の系統—3 モーラ語第 5 類の 2 種の音調型をもとにした考察—」 『東京大学言語学論集』 14, 557–581.
- 松森晶子 (1997) 「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」 『国語学』 189, 68–55.
- 松森晶子 (2011) 「隠岐島五箇方言の「式保存」とその例外について」 『音声研究』 15(3), 74–75.
- 松森晶子 (2015) 「三型アクセント記述研究の過去, 現在, 未来: 隠岐島の三型アクセントに焦点を当てながら」 『第 29 回日本音声学全国大会予稿集』 4–9.
- 松森晶子 (2016) 「三型アクセント記述研究の現在と未来—隠岐島の三型アクセントに焦点を当てながら—」 『音声研究』 20 (3), 24–45.
- 松森晶子 (2017) 「九州二型体系の複合語アクセント型はなぜ中和するのか—通時的視点から探る—」 『日本語の研究』 13(4), 51–67.
- 山口幸洋 (1982) 「アクセントにおける移行性分布の解釈」 『国語学』 130, 66–85.
- 山口幸洋 (1984) 「福井市郊外の二型アクセント」 『方言研究年報』 27, 207–229. 大阪: 和泉書院.
- 和田実 (1942) 「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」 『音声学協会会報』 71, 10–13.
- Labov, William. (1994) *Principles of Linguistic Change Vol.1: Internal Factors*. Malden, MA: Blackwell.
- Poppe, Clemens. (2016) Iambic feet in Japanese: evidence from the Maisaka dialect. *Gengo Kenkyu* 150, 117–135.
- Poser, William J. (1990) Evidence for foot structure in Japanese. *Language* 66(1), 78–105.
- Wang, William S-Y. (1969) Competing Changes as a Cause of Residue. *Language* 45, 9–25.

# 論文の内容の要旨

論文題目： 「福井県嶺北方言のアクセント研究」

氏名： 松倉 昂平

本論文は、福井県嶺北地方西部とその周辺（石川県加賀地方、福井県敦賀市）の 92 地点で筆者が行ったアクセント調査と先行研究に基づき、嶺北地方周辺のアクセント分布を示し、各地のアクセント体系の共時的記述を行うとともに、それらの系統的關係やアクセントに関わる諸現象の通時的由来を考察するものである。

1 章から 2 章までが本論への導入にあたり、第 I 部（3 章～8 章）で方言別の体系記述を行い、第 II 部（9 章～11 章）には特定の現象について複数の方言のデータを縦断的に分析・対照する論考が並ぶ。

以下、章別にその要旨をまとめる。

【1 章】「本稿の目的・記述対象地域の概説」では、福井県方言のアクセント研究史上の本論文の位置付けを確認し、調査対象地域の地勢や行政区分を概説する。

【2 章】「記述対象方言の概説」では、調査地域周辺の方言区画を示し、調査対象方言のアクセント以外の基礎的な方言特徴を概観する。2.1 節では諸方言の分節音の特徴・音節構造について述べる。[ffa]「焔」など坂井市三国町安島方言（新田哲夫 2011）では語頭に特徴的な重子音が現れることが知られるが、本地方では他地域にも[ssama]「諏訪間(すわま) (地名)」等、/s/や/k/の語頭の重子音が広く聴かれる。

【3 章】「アクセント分布の概観」ではまず全 92 地点の調査結果をアクセント分布図にまとめ、主要な地点について 2 拍名詞の音調を示す。本地方には主に「三型アクセント」、「二型アクセント」、「無型アクセント」、「(式の対立のない) 多型アクセント」の 4 種の体系が

分布する。「多型アクセント」は共時論・系統論的に大きく次の3種に分けられる：語音構造がアクセント核の位置決定に複雑に関与する特徴を有する  $P_n=n+1$  体系の「加賀・大谷タイプ」(6, 8章で詳述)、「加賀・大谷タイプ」と表面上の音調や類別体系は類似するが語音構造がアクセントに影響せず型の対立数が少ない「池田・芦見タイプ」(7章で詳述)、いわゆる垂井式アクセントであり語末核型を欠く  $P_n=n$  体系の「大野・東浦タイプ」。

嶺北地方西部には、無型アクセント方言に加え、アクセントの対立が安定的に実現せず、その区別意識が曖昧ないわゆる「曖昧アクセント」の話者・方言が多く存在する。3.8節ではそのような方言における調査の実態を報告する。

【4章】「あわら市・坂井市・福井市の三型アクセント」では、あわら市浜坂、あわら市北潟、坂井市三国町安島、福井市鮎川町の4方言の三型アクセントを記述する。各方言で区別される3つの型をA型、B型、C型と呼ぶと、各型の所属語彙は方言間でよく一致する一方、各型の表面上の音調は方言ごとに大きく異なる。北潟方言は「A型=文節末に下降([ハコカラ]モ) / B型=文節末に上昇(ヤマカラ[モ] / C型=上昇も下降もなし([マドカラ]モ)」、安島方言は「A型=文節末2音節以内に下降なし(ハ[コカ]ラ[モ~ハ[コカ]ラ]モ) / B型=文節末に半下降(ヤ[マカラ]!モ) / C型=文節末に大きな下降(マ[ドカラ]モ)」のような音調を持ち、北潟と安島では弁別的な特徴が文節末に固定される。鮎川方言の3つの型は「A型=語頭から数えて2, 3拍目が高い(ハ[コカ]ラ]モ) / B型=語頭から数えて1, 4拍目が高い([ヤ]マカ[ラ]モ) / C型=語頭から数えて2拍目が高い(マ[ド]カラ]モ)」のような音調で、弁別的な特徴が語頭から数えた位置に固定される。浜坂方言は「A型=語頭から数えて2拍目に下降(ハ[コ]カラ]モ) / B型=下降なし(ヤ[マカラ]モ) / C型=文節末から数えて2拍目に下降(マ[ドカラ]モ)」のような音調を持ち、ピッチの下降位置を語頭から数える型と文節末から数える型が共存する体系である。

同じ動詞語根を共有する一連の活用形アクセントが1つの型に一貫する「活用形アクセントの一貫性」はどの方言でも基本的に成り立たない。複合語アクセントは、どの方言でも前部要素の型が複合語に引き継がれる傾向が見られる。

【5章】「あわら市・坂井市の二型アクセント」では、あわら市清滝方言、坂井市丸岡町山竹田の2方言の二型アクセントを記述する。両方言で区別される2つの型を $\alpha$ 型、 $\beta$ 型と呼ぶと、それぞれ「 $\alpha$ 型=文節末に下降(ハ[コカラ]モ) /  $\beta$ 型=下降なし(ヤ[マカラ]モ)」のような音調を持ち、文節末における下降の有無が区別される。歴史的には、三型諸方言のA型とC型が $\alpha$ 型に、B型が $\beta$ 型に対応する。

【6章】「石川県加賀市方言の多型アクセント」では、加賀市塩屋町と加賀市山中温泉中津原町の2地点の体系を記述する。「加賀・大谷タイプ」に属し、下げ核の有無と位置が対立する  $P_n=n+1$  の体系であるが、アクセント核の置かれ得る位置は語音・語種・複合語構造から大部分予測可能である。例えば「語頭から数えて2拍目の母音が非狭母音(e, o, a)ならば1拍目にはアクセント核が置かれぬ」といった核の分布位置に語音が影響する制約が存在する。

【7章】「福井県今立郡池田町の「準多型」アクセント」では、池田町西角間方言のアクセント体系の共時的記述と音韻論的解釈を行う。6拍以下の単純語・複合語に関する限り、語頭から数えて1つ目のフット内部に下降が生じる「 $\alpha$ 型」と2つ目のフット内部に下降が生じる「 $\beta$ 型」の2つの型及びこれらの型の組合せによって解釈可能な体系である。フット内部の構造は、常に左側の音節が高い音調を担う強弱格 ( $\acute{\sigma}\sigma$ ) である。

前部要素が2拍以上の複合語は、複合語全体で $\alpha$ 型となる場合 ( $\alpha$ 型: [ナ]ガレボシ) と複合語全体で1つのアクセント単位にまとまらない場合がある。例えば、ニ[ワト]リゴヤ「鶏小屋」はアクセント上2単位形 ( $\beta$ 型+ $\alpha$ 型: ニ[ワト]リ+[ゴ]ヤ) として分析できる。

【8章】「福井県南条郡南越前町河野地区のアクセント」では、河野地区(旧南条郡河野村)のアクセント分布を示すとともに、南越前町大谷方言の多型アクセントを記述する。大谷方言のアクセント体系は「加賀・大谷タイプ」の1種であり、加賀市方言(6章)と同じく、語音がアクセント核の分布に影響を与える。

大谷方言には[ア]ーブラ「油」のように1型語の語頭母音が長音化する現象が見られるが、その音韻論的動機を本論文では「2音節2モーラの強弱格フット ( $\acute{\sigma}\sigma$ ) の回避」として説明する。強弱格フットを有する池田町方言(7章)とは対照的に、大谷方言では弱強格フット構造 ( $(\sigma\acute{\sigma})$  あるいは ( $\acute{\sigma}$ )) が選好される。

【9章】「N型諸方言における動詞活用形アクセントの比較・対照」では、三型アクセントを有する5方言(あわら市北潟、浜坂、坂井市三国町安島、福井市鮎川町、蒲生町)と二型アクセントを有する2方言(あわら市清滝、福井市浜別所)における2~4拍動詞の13種の活用形のアクセントを一覧し、それらの比較を通じて7つのN型方言間の系統的な距離を推測する。中でも北潟、浜坂の2方言は「過去否定形(一ナンダ)が全てB型に統一される」などの共通改新を有すること、清滝、浜別所の2方言は「進行・完了形(一テル)の型が過去形(一タ)の型と一致する」などの共通改新を有することから系統的に近い関係にあると推測される。鮎川、蒲生の2方言は改新特徴が比較的少なく動詞アクセントに関しては最も古態を残す。

【10章】「あわら市北潟方言の後部3拍複合名詞アクセント」では、三型アクセントを有するあわら市北潟方言の複合語アクセント規則を分析する。前部要素が2拍の場合に最も生産的な規則は、前部要素の型が複合語の型に引き継がれるいわゆる「式保存」であるが、この規則に沿わない例外も多い。その例外の多くは「前部要素B, C型→複合語A型」あるいは「前部要素C型→複合語B型」というパターンであるが、前者については後部要素の性質が関与する共時的な規則により解釈可能である。後者については中央語に14世紀頃生じたアクセント変化(いわゆる「体系変化」)の結果を反映する現象であり、現代の中央式諸方言に見られる式保存の例外(低起式前部要素→高起式複合語)と共通の通時的由来を有すると考えられる。

【11章】「地理的分布の解釈」では、2, 3拍名詞の類別体系の分布(11.1節)、個々の単語のアクセント型の分布(11.2節以降)などアクセントに関する言語地図を解釈する。

類別体系に関しては、より多くの類の区別を保つ保守的な体系が嶺北地方の外縁部に点在し、類の合流が進んだ革新的な体系が嶺北地方の中心部に分布する周圏分布が認められる。

嶺北地方北西部における個々の単語のアクセント型の地域差を見ると、沿岸部の N 型諸方言が伝統的な型を維持する一方、内陸部の N 型諸方言は革新的な型を有する（多くの語に所属型の移動が生じている）傾向が確認される。嶺北地方西部・石川県加賀地方における 2 拍 5 類名詞のアクセント分布を見ると、越前海岸付近から離れるほど徐々に A 型語（有核語）の 5 類名詞の割合が増え、逆に越前海岸に近付くほど C 型語（無核語）の割合が増えるという「移行性分布」が見られる。

最後に 12 章では各章の要旨と意義を総括する。本論文の記述的成果としては、長らく方言アクセント研究の空白地帯であった福井県嶺北地方において多地点調査を展開し、未報告種のアクセント体系が数多く存在することを明らかにした点が挙げられる。また第 II 部以降では、各体系の個別的な記述にとどまらず、動詞活用形アクセント（9 章）、複合語アクセント（10 章）、地理的分布（11 章）の 3 つの現象・観点に着目した体系間比較を通じて、諸体系の系統関係を解明する上で重要な手掛かりとなる知見を提示した。